

八つ墓村

映画文学人生論

原作：横溝正史 (1949-51) 「新青年」 「宝石」
監督：野村芳太郎(1977) 脚色：橋本忍
出演：金田一耕助 渥美清 撮影 川又昂
寺田達哉 萩原健一 音楽 芥川也寸志
田治見春代 山本陽子
森美也子 小川真由美 濃茶の尼 任田順好

八つ墓明神の祟りじゃ！

『八つ墓村』は尼子の落人伝説と因縁づけられた連続殺人事件を名探偵金田一耕助が解決する伝奇推理小説。

これまでに何度か映画化、テレビドラマ化されている。そのうち私が観たのは野村芳太郎監督の映画だが、筋は原作とはかなり違っている。映画によって原作の理解が深まるというより、逆に混乱させられるが、それもあまり気にならない。

人間の心の奥底にひそむ超自然的な祟りへの恐怖——それを呼び覚まさせることが狙いだとすれば、この映画は観客の本能や感覚に強く訴えかけて、原作の狙いを伝えることに成功している。

怪力乱神を語らず——私は理性を頼りにして生きたいと思っており、なるべくなら超自然的な存在は認めたくない。ホラー映画やホラー小説の類は敬遠している。

それでも『八つ墓村』だけは別と考えたくなるのは私の先祖が尼子の落人だったという言い伝えのためである。証拠はないが、先祖の言い伝えは無視できない。

横溝正史の原作によれば、八つ墓村は鳥取県と岡山県にある山中の一寒村。生業は炭焼と牛。この辺の牛は千屋牛と呼ばれており、最寄り駅は小説では伯備線のN（新見）、映画では隣の備中神代となっている。備中も伯備線でここまできれば雪国だ。私の実家のある村も鍾乳洞のある井倉も



八つ墓村

映画文学人生論

ここからは遠くない。

映画は「八つ墓明神の祟りじゃ！」という濃茶の尼のセリフが不気味にひびくが、それに劣らず不気味なのは名探偵金田一耕助に扮している寅さんの顔だ。寅さんは変装の名人で、備中高梁ではお寺の副住職になりすまし、お経をとなえたりしている。名探偵になってもおかしくはないが、八つ墓村であの顔に出くわすと恐ろしい。

備中高梁の武家屋敷跡には諏訪博（寅さんの妹さくらの夫）の実家があり、博の両親の葬式や法事に寅さんは出席している（「寅次郎恋歌」「口笛を吹く寅次郎」）。尼子の武将山中鹿之助が毛利氏によって謀殺されたのは近くを流れる高梁川の阿井の渡しだ。

しかし、八つ墓村のモデルは美作という説もある。名前からは真庭市の八束村が似ている。昭和十三年には美作の加茂町（現在の津山市）で三十人も的大量殺人事件がおこり、犯人は荒坂峠の頂上付近で自殺した。

美作加茂はJR因美線で津山から五つめの駅。三つ目の美作滝尾にはなぜか寅さんが姿を現したことがある（「寅次郎紅の花」）。

八つ墓明神は美作にも実在していないが、美作の湯原温泉には山椒魚明神が実在する。一度だけ私もお参りしたことがある。

山椒魚さわらぬ神に祟りなし